

胃食道逆流症による咳嗽：問診票による鑑別

灰田美知子¹⁾⁵⁾、小柳久美子¹⁾、高松富佐子¹⁾⁵⁾、橋口明彦³⁾⁵⁾、小川勝利³⁾⁵⁾、
鎌田 智³⁾⁵⁾、黒木宏隆⁴⁾⁵⁾
半蔵門病院アレルギー呼吸器内科¹⁾、BML²⁾、アミカライフサイエンス³⁾、
バンビ-薬局一番町店⁴⁾、環境汚染等から呼吸器患者を守る会(通称)エパレク⁵⁾

【目的】生活習慣の欧米化に伴い胃食道逆流症(GERD)による咳は増加傾向にあり他の慢性乾性咳嗽との鑑別は重要である。今回、FSSG (Frequency Scale for the Symptoms of GERD、草野 元康監修)、レスター咳問診票、GERD生活歴問診票について症例数を増やして検討した。

【方法】咳嗽で来院した117名、平均43.7歳(男37名;女性80名)に各問診票の記入を依頼した。FSSGのF値と他の問診票の各項目との相関、上位と下位30例の平均値の差で有意差の有無を調べた。

【結果】平均F値は10.9(酸逆流症状5.87;運動機能以上5.05)であった。F値と高い相関を示した項目はレスター問診票にはなかったが上位と下位の比較では「咳で胸が痛くなる」「声がかすれる」が有意だった。GERD生活歴問診票では「胸に重い感じ」「ゲップが出る」「食後にムカムカする」などで有意に相関があり上位と下位の比較でも上記2項目は有意であった。「胃の調子が悪い」「胸や喉が詰まった感じ」「体重が多い」「睡眠中に咳で目が醒める」「ベルトや下着できつくしめる」「朝の歯磨きの時にむかむかする」「仕事の事を考えながら食事をする」などの項目も有意であった。

【結論】GERDによる咳は慢性咳嗽で来院する患者の多くに存在する可能性があり、その特徴を捉えて診断を疑う事は重要である。